

汲めども尽きぬ「生命の不思議」

～福岡伸一・中屋敷均の筆の冴え

図書館係 阿部健治

百年に一度のパンデミック。新型コロナウイルスの蔓延は文字通り世界を震撼させ、私たち一人一人を大きく揺さぶった。「コロナとの戦いに勝つ！」という言説が飛び交うのもむべなるかな、と思わせる。

しかし、ちょっと待ってほしい。福岡伸一はもう少し冷静に、大きな目で見た方がいいということを教えてくれる。福岡は朝日新聞の文化欄に不定期で寄稿し、「ウイルスは私たち生命の不可思議な一部であるがゆえに、それを根絶したり撲滅したりすることはできない。私たちはこれまでも、これからもウイルスを受け入れ、共に動的平衡を生きていくしかない。」（波線、太文字は筆者による）と言っている。この「動的平衡」というのは、福岡が主著『生物と無生物のあいだ』（講談社文庫 2007）の中でも詳しく述べている重要な概念で、「生態系にしる、生命体にしる、およそ「秩序」というものは固定化すると脆いもので、それを守るためには絶えず壊し続け、再生し続ける方がよい」ということを指している。そして、そのために生命には自己複製システムがあるのだ。生命体は常に凄まじい勢いで新陳代謝を続けており、人間でも何か月かすると体を作り上げていた要素はすべて入れ替わるといふ。福岡はこのさまを「強風にさらされる砂浜で砂の城を維持し続ける」ことに例えている。文系の感性を刺激する実に卓抜な比喩だ。

こう考えれば、コロナウイルスも人間に「動的な」揺さぶりをかける環境の一部であり、それに対応してよりよき「平衡」状態を作り出していこうと努力するところに我々が生きている意義はあるということになる。

中屋敷均の『ウイルスは生きている』（講談社文庫 2016）は生物学系の書物としては、筆者の中では福岡の前掲書以来の久々のヒットであった。中屋敷の本は我々のDNAの多くがウイルス由来であるということを教えてくれた。要するにウイルスは我々のような多細胞生物の別働隊の働きをしているらしい。細胞内に蓄えておけるDNAの量は限られているので、外に出して泳がせておく（その間に変異によってより有用なものが生まれる可能性もある）。それを適宜受け入れて、動的な環境の揺さぶりに備える。それが生物の基本的なスタンスというわけだ。

ウイルス由来のDNAが我々に偉大な貢献をしてくれた例として、中屋敷は「胎児への攻撃を阻止するタンパク質を作り出す遺伝子」を挙げる。胎児は母体にとって異物であるから本来なら免疫系の攻撃を受けるはずなのだが、このタンパク質の働きによってそれを免れているというのだ。哺乳類はどこかの時点でウイルスからこの遺伝子を獲得したからこそ、哺乳類になれたのだ！この遺伝子はある寄生バチも獲得していて、自分の卵を芋虫に打ち込むときに一緒に入れるとか。だからこのハチの幼虫は芋虫の中で成長できるそうだ。

この例でわかるようにウイルスとの交流は、環境の揺さぶりに常に備える必要がある我々には不可欠なことなのである。我々はウイルスというと凶悪なものばかりをイメージするが、大半は我々にあだを為すことなく共生していると言えるようだ。足女生諸君にもこの二著を読んで是非認識を拡げてもらいたい。

また、ここでもう一つ強調しておきたいのは福岡、中屋敷の文章家としての力量である。章立てもそのネーミングも本当にエレガントで、専門外の人間にもよくわかるように、見事な比喩を駆使して私たちを夢の世界に導いてくれる。そのわくわく感は、つまらないファンタジーなどの比ではない。